

# LOS CAPRICHOS

芥川龍之介

青空文庫



笑は量的に分てば微笑、哄笑の二種あり。質的に分てば嬉笑、嘲笑、苦笑の三種あり。……予が最も愛する笑は嬉笑、嘲笑、苦笑と兼ねたる、爆声の如き哄笑なり。アウエルバツハの穴蔵に愚昧の学生を奔らせたる、メフェイストフエレエスの哄笑なり。

——カアル・エミリウス——

ユダ

逾越と云へる「種入れぬ麵包の祭」近づけり。祭司の長学者

たち、如何いかにしてかイエスを殺さんと窺うかがふ。但ただ民を畏おそれたり。偕さて悪魔十二の中うちのイスカリオテと称とふるユダに憑つきぬ。ユダ橄欖かんらんの林を歩める時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長をさたちに売わたせ。然さすれば三十枚の銀子ぎんすを得べし。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエエルサレムの町をさまよへる時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長をさたちに売わたせ。然さらば爾なんぢもイエスと共に、必かならず十字架に釘つけらるべし。」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのもとに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠なんぢに爾なんぢを知る。爾は荒野あらのの獅子ししよりも強し。但ただ小羊こひつじの心を忘るる勿なれ。」ユダ、イエスの言葉を悦べり。されどその意味を覚さとらざりき。逾すぎ越こしの祭来まつりりし時、イエス弟子と共に食に就け

り。悪魔みたび三度ユダに云ひけるは、「イエスを祭司をさの長たちに売わたせ。然さすれば爾なんぢの名、イエスの名と共に伝はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黒暗やみよりも恐怖あらん。爾は天国の奴隸しもべたらざるも、必かならず地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾なんぢの妃ひ、七しち頭の毒竜は爾の馬、火と煙と硫黄いわうとは汝なんぢが黒檀こくたんの宝座みくらの前に、不断の香煙かうえんを上のぼらしめん。」ユダこの声を聞きし時、目まのあたりに地獄の莊嚴を見たり。イエス忽ちユダに一ひとつ撮つまみの食物を与へ、静かに彼に云ひけるは、「爾なんぢが為さんとする事は速かに為せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出でたり。時既に夜よなりき。ユダ祭司の長カヤパの前に至り、イエスを彼に売わたさんと云へり。カヤパ駭おどろきて云ひけるは、「爾なんぢは何物なるか、イエスの弟子でしか、

はたイエスの師か。」そはユダの姿、額は嵐の空よりも黒み、眼は焰よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。……

## 眼

—— 中華第一の名庖丁 張肅臣の談 ——

眼をね、今日は眼を御馳走しようと思つたのです。何の眼？

無論人間の眼をですよ。そりや眼を召上がらなければ、人間を召上つたとは云はれませんや。眼と云ふやつはうまいものですぜ。

脂があつて、齒ぎれがよくつて、——え、何にする？ まあ、湯へ入れるんですね。丁度鳩の卵のやうに、白眼と黒眼とはつき

りしたやつが、シヤンツアイ 香 菜が何かぶちこんだ中に、ふはふは浮いてるやうと云ふんです。どうです？ 悪くはありますまい。わたし 私なんぞは話してゐても、自然と唾氣つばきがたまつて来ますぜ。そりや清せいた湯うえんくわ 燕窩れいたんだとか清湯れいたん 鵪鶉ひいたん 蛋だとかとは、比べものにも何なににもありませんや。所けふが今日その眼を抜いて見ると、——これにや私も驚きましたね。まるで使ひものにやならないんです。何、男か女か？ 男ですよ。男も男も、髭ひげの生えた、フロツク・コオトを着てゐる男ですがね。御覧なさい。此ここ処こに名刺があります。Herri St uffendpuff. ちつとは有名な男ですか？ 成なるほど程ほどね、つまりその新聞や何かに議論を書いてゐる人間なんでせう。そいつの眼玉がこれぢやありませんか？ そら、壁へ叩きつけても、容易な事ぢや

破れませんや。驚いたでせう。二つともこの通り入れ眼ですよ。  
硝子細工ガラスざいくの入れ眼ですよ。

### 疲労

雨を孕はらんだ風の中に、竜騎兵の士官を乗せた、アラビア種だねの白馬ろうまが一頭、喘あへぎ喘あへぎ走つて行つた。と思ふと銃声ポプラーが五六発、続けさまに街道かいだうの寂寞せきぼくを破つた。その時白楊ポプラーの並木なみきの根がたに、尿ねうをしやんだ一頭の犬は、これも其処そこへ来かかつた、仲間のむくいぬ犬に話しかけた。

「どうだい、あの白馬の疲れやうは？」



「莫迦ばか々々しいなあ。馬ばかりが獸けものぢやあるまいし、——」  
 「さうとも、僕等に乗つてくれれば、地球の極はてへも飛んで行くの  
 だが、——」

二匹の犬はかう云ふが早いか、竜騎兵の士官でも乗せてゐるや  
 うに、昂かうぜん然と街道を走つて行つた。

## 魔女

魔女は箒ほうきに跨またりながら、片々へんぺんと空を飛んで行つた。

それを見たものが三人あつた。

一人ひとりは年をとつた月だつた。これは又かと云ふやうに、黙々と

塔の上にかかつてゐた。

もう一人は風見かぜみの鶏だつた。これはびつくりしたやうに、ぎいぎいさをのさを楯さをの上に啼きまはつた。

最後の一人は大学教授 Dunderguz 先生だつた。これはその後ご熱心に、魔女が空を飛んで行つたのは、箒が魔女を飛ばせたのか、魔女が箒を飛ばせたものか、どちらかと云ふ事を研究し出した。

何でも先生なんは今日こんにちでも、やはり同じ大問題を研究し続けてゐるさうである。

魔女は箒に跨りながら、昨夜ゆうべも大きな蝙蝠かうもりのやうに、片々と空を飛んで行つた。

## 遊び

崖に臨んだ岩の隙には、一株の羊齒すきが茂つてゐる。トムはその羊齒の葉の上に、さつきから一匹の大土蜘蛛おほつちぐもと、必死の格闘を続けてゐる。何しろ評判の渾名通りあだな、親指位くらゐしかない男だから、蜘蛛と戦ふのも容易ではない。蜘蛛は足を拵げた儘、まつしぐらにトムへ殺到する。トムはその度に身をかはせては、咄嗟とつさに蜘蛛の腹へ一撃を加へる。……

それが十分程続いた後のち、彼等は息も絶え絶えに、どちらも其処へあすくまつてしまつた。

羊齒しだの生えた岩の下には、深い谷底ひらが開いてゐる。一匹の毒竜

はその谷底に、白馬しろうまへ跨またがつた聖ヂヨオヂと、もう半日も戦つてゐる。何しろ相手の騎士の上には、天主てんしゆの冥護みやうごが加くつてゐるから、毒竜も容易に勝つ事は出来ない。毒竜は火を吐きかけ、吐きかけ、何度も馬の鞍くらへ跳り上る。が、何時いつでも竜の爪は、騎士の鎧よろひにすべつてしまつた。聖ヂヨオヂは槍やりを揮ふるひながら、縦じゆう横わうに馬を跳らせてゐる。軽快な蹄ひづめの音、花々しい槍やりの閃ひらめき、それから毒竜の炎ほのほの中に、さんくさんく々と靡なびいた兜かぶとの乱れ毛、……

トムは遠い崖の下に、勇ましい聖ヂヨオヂの姿を見ると、苦にが々々しさうに舌打ちをした。

「畜生ちくしやう。あいつは遊んでゐやがる。」

Don Juan aux enfers

ドン・ジュアンは舟の中に、薄暗い河を眺めてゐる。時々古い舟ふなべりを打つては、蒼白い火花ほとぼしを迸ひららせる、泊夫サフランいろ藍色の浪の高さ。その舟の艫ともには巖いはほのやうに、黙々と今日けふも權かいを取つた、おお、お前！ 寂しいシヤアロン！

或れい靈は遠い浪あひだの間に、高々と両手をさし上げながら、舟しうちう中の客を呪のろつてゐる。又或靈は口惜くやしさうに、舟べりを煙けむりらせた水沫しぶきの中から、ぢつと彼の顔を見上げてゐる。見よ！ あちらの舳へさきに縫すがつた、或靈の腕たくの逞たくましさを！ と思ふとこちらの舳ともにも、シヤアロンの權かいに払かはれたのか、真逆まつさかさま様に沈みかかつた、或靈の

二つの足のうら！

妻を盗まれた夫の靈、娘を掠められた父親の靈、恋人を奪はれた若者の靈。——この河に浮き沈む無数の靈は、一人も残らず男だつた。おお、わが詩人ボオドレエル！ 君はこの地獄の河に、どの位夥しい男の靈が、泣き叫んでゐたかを知らなかつた！

しかしドン・ジュアンは冷然と、舟中に劍をついた儘、勻の好い葉巻へ火をつけた。さうして眉一つ動かさずに、大勢の靈を眺めやつた。何故彼はこの時でも、流俗のやうに恐れなかつたか？ それは一人も靈の中に彼程の美男がゐなかつたからである

!

## 幽霊

或ふるほんや古本屋の店頭。夜よる。古本屋の主人は居睡りをしてゐる。かすかにピアノの音がするのは、近所にカフエ工のある証拠らしい。

第一の幽霊（さもがっかりしたやうに、朦朧もうろうと店さきへ姿を現す。）此処ここにも古本屋が一軒ある。存ぞんぐわい外がいかう云ふ所には、品物が揃つてゐるかも知れない。（熱心に棚の書物を検べる。）

近ちかまつ松全集、万葉集まんえふしふりやくげ略解、たけくらべ、アンナ・カレニナ、芭蕉句集ばせう、——ない。ない。やつぱりない。ないと云ふ筈はない

のだが……

第二の幽霊 (これもやはり大儀たいぎさうに、ふはりと店へはひつて来る。) おや、今晚は。

第一の幽霊 今晚は。どうだね、その後君の戯曲ごは？

第二の幽霊 駄目だめ、駄目。何処どこの芝居でも御倉おくらにしてゐる。や

つてゐるのは不相変あひかはらず、黴かびの生えた旧劇ばかりさ。君の小説はどうなつたい？

第一の幽霊 これも御同様絶版と来てゐる。もう僕の小説などは、誰も読むものがなくなつたのだね。

第二の幽霊 (冷笑するやうに。) 君の時代も過ぎ去つたかね。

第一の幽霊 (感傷的に。) 我々の時代が過ぎ去つたのだよ。



尤も僕等が往生したの、もう五十年も前だからなあ。

第三の幽霊　（これは燐火を飛ばせながら、愉快さうに漂つ

て来る。）今晚は。何だかいやにふさいでゐるぢやないか？　幽

霊が悄然としてゐるなんぞは、当節がらあんまりはやらないぜ。

僕は批評家たる職分上、諸君の悪趣味に反対だね。

第一の幽霊　僕等がふさいでゐるのぢやない。君が幽霊にして

は陽氣過ぎるのだよ。

第三の幽霊　そりや大きにさうかも知れない。しかし僕は今夜

という今夜、始めて死に甲斐を感じたね。

第二の幽霊　（冷笑すやうに。）君の全集でも出来るのかい？

第三の幽霊　いや、全集は出来ないがね。兎に角後代に僕の

名前が、伝はる事だけは確たしかになつたよ。

第二の幽霊 (疑はしさうに。)へええ。

第一の幽霊 (喜よろこしさうに。)本当かい？

第三の幽霊 本当とも。まあ、これを見てくれ給へ。(書物を一冊出して見せる。)これは今日出来た本だがね。この本の中に僕の事が、ちやんと五六行書いてあるのだ。どうだい？ これぢやいくら幽霊でも、はしやぎまはらずにはゐられないぢやないか？

第二の幽霊 ちよいと借してくれ給へ。(一生懸命に頁ページをはぐる。)僕の名前は出てゐないかしら？

第一の幽霊 名前位くらゐは出てゐるだらう。僕のも次手ついでに見てくれ

給へ。

第三の幽霊　（得意さうに独り言を云ふ。）おれもとうとう不朽きうになつたのだ。サント・ブウヴやテエヌのやうに。——不朽と云ふ事も悪いものぢやないな。

第二の幽霊　（第一の幽霊に。）どうも君の名は見えないやうだよ。

第一の幽霊　君の名も見えないやうだね。

第二の幽霊　（第三の幽霊に。）君の事は何処どこに書いてあるのだ？

第三の幽霊　索引さくいんを見給へ。索引を。××××と云ふ所を引けば好いいのだ。

第二の幽霊 成程なるほど、此処ここに書いてある。「当時数かずの多かつた批評家中、永久に記憶さるべきものは、××××と云ふ論客である。……」

第三の幽霊 まあ、ざつとそんな調子さ。其処そこまで読めば沢山たくさだよ。

第二の幽霊 次手ついでにもう少し読ませ給へ。「勿論彼は如何いかなる点でも、毛頭まうとう才能ある批評家ではない。……」

第一の幽霊 (満足さうに。) それから?

第二の幽霊 (読み続ける。) 「しかし彼は不朽になるべき、十分な理由を持つてゐる。……」

第三の幽霊 もうそれだけにして置き給へ。僕はちよいと行く

所があるから。

第二の幽霊　まあ、しまひまで読ませ給へ。(愈いよいよ大声に。)

「何なにとなれば彼は——」

第三の幽霊　ぢや僕は失敬する。

第一の幽霊　そんなに急がなくても好いいぢやないか？

第二の幽霊　もうたつた一行だよ。「何となれば彼は終しゆう始し一

貫——」

第三の幽霊　(やけ気味に。)ぢや勝手に読み給へ。左様さようなら。

(燐火と共に消える。)

第一の幽霊　何なんだつてあんなに慌てたのだらう？

第二の幽霊　慌てる筈さ。まあ、これを聞き給へ。「何となれ

ば彼は終始一貫、芥川竜之介あくたがはりゆうのすけの小説が出ると、勇ましい悪あくこう口を云ひ続けた。……」

第一の幽霊 (笑ふ。) そんな事だらうと思つたよ。

第二の幽霊 不朽もかうなつちや禍わざはひだね。(書物を抛はり出す。)  
その音に主人が眼をさします。

主人 おや、棚の本が落ちたかしら。こりやまだ新しい本だが。  
第二の幽霊 (わざと物凄い声をする。) それもぢきに古くなるぞ。

主人 (驚いたやうに。) 誰だい、お前さんは?

第一の幽霊 (第二の幽霊に。) 罪な事をするものぢやない。

さあ、一しよに Hades へ帰らう。(消える。)

第二の幽霊　ちつとは僕の本も店へ置けよ。（消える。）  
主人は呆氣あつけにとられてゐる。

（大正十年十一月）





# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第三卷」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2004年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# LOS CAPRICHOS

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>